National University of Singapore 訪問

文化学園大学杉並中学・高等学校　次世代教育開発部長　染谷 昌亮

１　はじめに

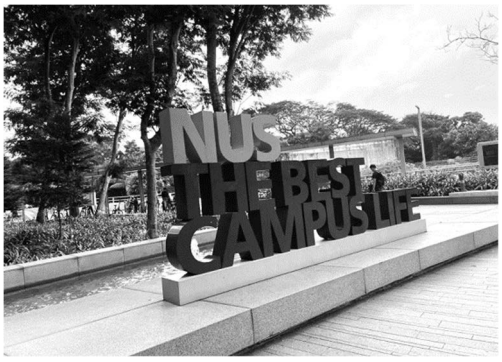
私立学校教員海外研修団は、2023 年 8 月 24 日午後、シンガポール国立大学（National University of Singapore : NUS）を訪問した。当校は 1905 年に設立されたシンガポールで最も歴史ある国立大学であるとともに、国内最高峰の教育・研究レベル（世界大学ランキングトップ 20 位以内）を誇る。世界 40 ヵ国の大学と交換留学制度を設けており、学生の 15%程度は外国籍である。3 つのキャンパスのうち、メインキャンパスである Kent Ridge を訪問した。

２　学部生によるキャンパスツアー

NUS 到着後すぐに語学教育研究センターを訪れたのは、所長であり日本語プログラムご担当のウォーカー泉先生にお会いするためである。この度先生のご紹介で、当校日本語プログラムを実際に履修している学生たちとグループ（研修員２名に対して学生３名）を組み、キャンパスツアーをしてもらいながら対話するという貴重な機会をいただいた。ここでは、キャンパスの様子についてとくに印象に残ったことを記す。

キャンパスツアー出発地点にて

1.5 ㎢と言われるその広大なキャンパスはまるで、一つの街のようだった。各学部のスクール、研究所、図書館（7 館）、学生寮（10 棟以上）などの建物が緑の中に点在しており、その間を無料バスが走っている。短時間のツアーだったため、その全貌をつかむことは到底叶わなかったが、その広大さや学生たちの活気、また多様な国籍・宗教の学生が共存する学び舎であることは十分に体感できた。



キャンパス内のオブジェ

言語・分野ごとに特化した図書館

ランチは、ツアーグループごとに、数ある食堂のうちのいずれかでいただいた。ハンバーガーやパスタなどの洋食、日本・ベトナム・中国・インドなどアジア各国の料理、さらにはベジタリアン向けメニューまで揃っており、食堂を見るだけでもNUSのダイバーシティを実感できる。また、一部の食堂ではキャッシュレス決済などのIT化が進んでいた。

活気ある食堂の様子

３　語学教育研究センターおよび日本語プログラムの説明

ツアーの後、講義室にてウォーカー泉先生から次の内容の説明を受けた。

(1)　語学教育研究センターについて

約120名の教員（常勤40名・非常勤80名）が協力し、13 言語のプログラムを実現している。その中でも日本語プログラムは一番人気で、約20名の教員が携わっている。

語学教育研究センターは、言語学習プログラムはもちろん、教師能力開発、国際言語教育大会の開催、学術雑誌の刊行などを担う。

言語ごとに分かれた掲示物

(2)　日本語プログラムについて

当プログラムの目標は①コミュニケーション能力 ②異文化理解 ③自立学習 ④社会能力（リーダーシップ・協調性など） ⑤日本関連ビジネスで活躍できる人材の育成の５つである。

これらの実現のために、カリキュラムおよび教授法にいくつもの工夫が講じられている。例えば、日本語での会話・作文・読解練習などの際には、その背景にある日本の文化についても同時に学ぶ。相槌、会釈、婉曲的な表現などの裏にある日本人の国民性に関しても学習することで、より本質的なコミュニケーションスキルの醸成を目指しているという。また、早稲田渋谷シンガポール校やシンガポール日本人小学校、日系企業などと連携したプロジェクト型学習も実践している。

(3)　日本語プログラム履修生について

アニメや漫画などの日本文化に興味を持ち、日本語を学び始める学生が多い。毎学期、7段階程度の習熟度に分け日本語プログラムが開講される。最初級クラス「日本語1」の履修者は300～400名に及ぶが、上級になるほど履修者数は減少し、最上級クラスの履修者は30名程度である。このように履修者が減っていくのは、相対評価の中で高い成績を取得することが難しく、専門科目との両立に苦労する学生が多いことによるという。

卒業後の進路としては、シンガポールの政府機関、小中高などの教育機関のほか、その日本語力を生かし日系企業（総合商社、IT 企業、金融、旅行業など幅

広い）に就職する学生もいるとのことだった。

4　日本語プログラム履修生との対話

ウォーカー泉先生のご説明の後、日本語プログラム履修生とのグループトークセッションを 20 分間×4 回行った。キャンパスツアーと合わせると、15 名程度の学生との対話の機会をいただいたことになる。その中で感じたことを記す。

(1)　日本語でのコミュニケーションスキルの高さ

すぐに気付かされたのは、学生たちの日本語運用力の高さである。NUS の学生・教育環境がいかに優れているかを痛感させられた。さらに驚くべきことに、中には「日本語を習い始めてまだ半年」という学生もいた。彼らは、日本のアニメや漫画を通じて、自然と日本語に慣れ親しんできたという。また、先述のウォーカー泉先生のご説明を裏付けるように、学生たちのコミュニケーションは日本の文化や社会性に関する理解を感じさせるものだった。

トークセッションの様子

(2)　学習観・キャリア観

対話をする中で、学生たちの「学びに対する動機付け」や「理想の働き方」などのビジョンが非常に明確であることにも気付かされた。また、経済的自立への意志を強く持っている学生が多いことが印象的だった。中には「日本は好きだが、給与が安いので日本で働くつもりはない」「大学院に行かずとも十分稼げるので、大学院には行かない」と発言する学生も複数名いた。

この主張あるいはそれを明確に表現する学生の態度には、シンガポールの国民性がよく表れているように感じられた。その良し悪しに関わらず、学びや人生の目的を強烈に自覚している学生たちの姿から、私たち日本人が学ぶべきことが多くあるように思う。

またほとんどの学生に共通して、海外で働くことへのハードルを感じていないように見えた。この傾向は NUS だからなのか、シンガポールだからなのかは定かでないが、最低限英語と中国語のバイリンガルである彼らからすれば、当然のことなのかもしれない。その上で「自分がどこで生きていきたいか」を自由に思考している彼らの姿に、羨ましささえ覚えた。グローバル化が進む現代社会において、日本の学校教育においても、このようなキャリア観を醸成することが重要な気がしてならない。

(3)　シンガポールと日本の教育制度・働き方の違い

トークセッションの中では、学生たちから私たち研修員にも質問が寄せられた。質問事項としては日本の教育制度や働き方に関するものが多かった。中に

は、「ゆとり教育」「いじめ」「教員の勤務時間の長さ」など、日本の教育界でまさに議論される事項に言及する学生もいた。それらに回答する過程で、彼らの常識と日本の常識とのズレが見えてきた。その一部を記す。

・シンガポールではバイリンガルが当たり前。ただし第三言語を全員が学ぶわけではない。
・NUS の学生がインターンをする場合、社会人に匹敵する給与が支払われる。
・NUS では 1 年次に就職先が決まり、その会社が学費を負担する場合がある。
・シンガポールでは、義務教育から留年の仕組みがある。
・シンガポールの企業では「残業代を支払う」という習慣がほとんどない。だからこそ残業時間が短くなるし、それが当然のことと考えられている。
・女性の社会進出は当たり前。だからこそ共働きが多く、家政婦利用が普及している。

以上のような意見を聞き、日本との違いを実感した。

５　おわりに

NUS という世界トップレベルの大学の学生や教育プログラムに触れる時間は、大変刺激的だった。日本より面積の小さな島国にありながら、紛れもないダイバーシティを確立している。今回その教育現場に触れることができたことを、幸せに思う。この場を実現してくださった NUS ウォーカー泉先生と当研修コーディネーター上松恵理子先生および東京都私学財団の皆様に心から感謝申し上げたい。

この経験を日本の教育現場で生かすことが恩返しであると信じ、この機会を分かち合った研修団の皆様とともに、研鑽に励んでいこうと思う。

集合写真 ＜最前中央左：ウォーカー泉先生＞

参考：NUS ホームページ